

第4回 仙台市総合計画審議会起草委員会議事録

日 時 平成22年3月10日(水) 18:30~20:30
会 場 仙台市役所2階 第四委員会室
出席委員 江成敬次郎委員、大滝精一委員、小野田泰明委員、小松洋吉委員、西大立目祥子委員、庭野賀津子委員、間庭洋委員、柳井雅也委員 [8名]
オブザーバー 大村虔一総合計画審議会会長
事務局 伊藤企画市民局次長、佐々木総合政策部長、折田総合計画課長
議 事 1 開会
2 議事
(1) 新基本構想の策定方針について
(2) その他
3 閉会
配付資料 1 新基本構想策定方針(案)
2 新基本構想の都市像(たたき台)

1 開会

大滝精一委員長

それでは、定刻になりましたので、これから第4回の起草委員会を始めたいと思います。江成委員と西大立目委員は少し遅れていらっしゃると思いますが事前に連絡をいただいておりますので始めたいと思います。

最初に、本日の議事録署名委員を指名したいと思います。前回、小松委員にお願いいたしましたので、五十音順ということで庭野委員にお願いしたいと思いますけれども、よろしいでしょうか。

庭野賀津子委員

はい。

大滝精一委員長

よろしくお願いいたします。

続きまして、議事に入る前に定足数等の確認を行います。

事務局から報告をお願いいたします。

折田総合計画課長

本日現時点で6名の委員の方にご出席をいただいておりますので、定足数を満たしていることをご報告させていただきます。先ほど委員長からお伝えいただきましたように、江成委員と西大立目委員は遅れて来られるということで連絡を受けております。

続きまして、資料でございますが、お手元に、座席表、次第、資料一覧、資料1。資

料 1 の中身といたしまして資料 1 の本体、別添図 1 から 4、それからその図 2 と 3 の間に、カラー刷りの追加資料を配付させていただいております。それから資料 2、お預かりしております資料のファイル 2 点を置かせていただいております。それから本日は資料を事前にデータでお送りいたしましたので、紙ベースのものをご用意いたしております。資料一式を封筒に入れて置いておりますので、お持ち帰りいただき、お使いいただければと存じます。

また、本日このような時間からの開始ということになりましたので、簡単ではございますが軽食を用意させていただいておりますので、適宜おとりいただければと思います。事務局からは以上でございます。

大滝精一委員長

どうもありがとうございました。

資料等についてはよろしいでしょうか。

2 議事

(1) 新基本構想の策定方針について

大滝精一委員長

それでは、早速これから議事に入りたいと思います。

まず、議事の第 1 の新基本構想の策定方針についてです。

これにつきましては、前回オブザーバーで出席いただきました大村会長にもご意見をいただきながら、幾つかの論点について議論を行いました。それを踏まえて、審議会へ報告する形にした資料を皆様のお手元にお配りしております。

始めに、既にお目通しいただいているかとも思いますけれども、その説明を私からさせていただいて、その後、委員の皆様方からいろいろご意見を更にいただきたいと思っております。

それでは、早速ですが、まず資料 1、新基本構想策定方針（案）をご覧ください。どんな策定方針で基本構想を書いていくのかということが示されています。まず、新基本構想の構成につきましては、現行の基本構想と同様の構成で、策定の趣旨、都市像、施策の基本方向、基本構想の推進という 4 部構成で考えております。

それから、起草に当たっての基本的な視点ですが、まず冒頭の部分で策定の趣旨というものをうたうということになっていまして、これにつきましては検証作業等を通して得られた以下のような時代認識を踏まえてということで、これは、実はこれまでの起草委員会の中でもかなり議論をしてきたことではあると思います。人口減少の問題、それから低炭素社会の実現といったこと、それから特に 3 番目ですね、これはこれまでの委員会の中では余りなかった時代認識ですけれども、成長するアジア諸国のパワーを東北の成長につなげていくという意味での経済とか産業とか交流拠点の役割といったものを認識していくということ、さらには、まちづくりの主体とか協働の取組の多様化と相互連携の必要性、あるいは将来への可能性を開く、特に子供とか若年層、若者層を中心とした人材育成の重要性、あるいは都市のインフラの整備から維持管理へのシフト、それ

から国とか地方を取り巻く財政制約というのは、10年前に比べてはるかに大きな制約要因になっていきますので、そういうことについても触れていく。特にこの10年の間に、基本構想の基本的な視点として時代認識の中で議論していく必要があるところを、もう少し強調して書いていくという方向でいかがでしょうかということです。

それから、2つ目の都市像です。都市像については、また後半で具体的な骨子の説明もありますけれども、基本的な方向性をここでは書いてあります。現行基本構想の4つの分類、「健康都市」、「杜の都」、「中枢都市の機能」、「学都の知的資源」といったものがあったわけですが、これについては新基本構想においても分類を一応念頭に置きながら、ここを基本的には維持しつつもそれに新しいものを入れて、もう少し全体の構成を組み換えたらどうだろうかということです。

特に、人口減少とか少子高齢化、経済の成熟化というところがより強く意識されるような基本構想においては、都市像の実現を行っていく原動力として「行動する市民力」という新しいキーワードをむしろ強調して、ダイナミックな行動をする市民力がむしろ都市を形づくっていくとか、その中で仙台固有の資源から新しい価値を創造していくということを強調していくということが起草委員会の中でも議論されてきたと思います。

現行の起草委員会の中では、市民主体の創造的な都市づくりという言葉でさらっとそこは書いてあるわけですが、そこを余りさらっとではなく、もうちょっときちんと議論したらどうだろうかというのがこの2番目のところです。これについては後でまた、別添の図1とか図2も踏まえて説明したいと思います。

裏面に行ってください。

さらには、今、申し上げたことを踏まえて、どういう形で都市づくりを進めていくのか、それから市民が活動を通して学び育つ仕組み、これは特に前回の起草委員会の中でも出てきたと思いますけれども、そういうものもしっかりと書き込んでおく必要があるのではないかと思います。

それから、別添図4に書いてあるように、都市像についてはピックアップされたキーワードを踏まえて、特に市民の目線で、どちらかというと行政の立場から仙台市の都市像とかまちづくりを俯瞰するというよりも、もう少し市民の視点に立って見たときにどう見えるとか、市民にとってそれがどういう可能性とか行動に結びついてくるのかという、より実感の持てる表現で書き分けていくことが必要ではないかということです。

それから、施策の基本方向ですが、都市像に沿った形で新しい時代認識を踏まえながら項目の記述を見直していくという形です。特に、これは前から議論があったかと思いますが、その中でも地域社会の形成に関する記述とか、それから循環型の都市、特にこれは環境問題を始めとする認識が10年前と随分変わってきていますので、そこも踏まえた記述、それから都市構造の形成という、これは具体的にはどの地域にどんな機能を配置するとかどういう機能をどこが担っていくとかという記述が出てくるのですが、これはもう10年前と随分変わってきているので、そういうことについては、時代状況とか実態に即して効果的な施策をつなげるための組替えをやっていくことが必要かと思います。特に施策の基本方向について、(1)から(3)はかなり抜本的な書きかえを必要としていると考えています。

それから最後、基本構想の推進の部分です。ここは先ほどの「行動する市民力」というものを生み出し、それを育てていくという視点も重要であろうという議論は前からあったと思います。そのための具体的な都市経営の基盤とかあり方についての議論を、この基本構想の推進の部分でしっかり行っておくことが大事ではないかと。だから、「行動する市民力」というのは、聞くといい言葉ですし、だれからも耳ざわりのいい言葉ですけれども、これは逆に言うと市民の側にとっても市民の力を育てていくとか、つくっていくとか、市民自身が自覚していくとかという論点が今度の基本構想の中で非常に重要ではないかと思うのです。そういうものをしっかりとこの中に書き分けていくとともに、特に、都市づくり・まちづくりに関する主体の役割、これも起草委員会の中でも随分議論がありましたが、それぞれまちづくりにかかわる主体やプレーヤーを、もうちょっと明確に認識したほうがいいのではないかと。それから、とりわけ市役所の政策形成過程における市民参画のあり方についてはもっと突っ込んだ議論とか、そういう可能性を言及しておいたほうがよいのではないかと。

それからこれは大村会長からもありましたし、3回目の起草委員会の中で私も申し上げたことですが、総合計画の体系全体を視野に入れた形で、市民参画のあり方とか、そこにおける目標の設定とか、フォローアップのあり方についても、市民とのかかわりとか、「行動する市民力」をどういうふうここに取り込んでいくのか、そことどうやってつなげていくのかということが基本構想の推進という点では非常に重要ではないかという、そのような論点だったかと思います。

それから、スケジュールについてはそこにありますとおり、新基本構想策定方針に関して、審議会での審議、了承を得た後に、基本構想の具体的な記述については起草委員会において議論を更に進めていくということ、それから新基本構想の中間案につきましては、今年の5月を目途に審議会での議論をしていくというスケジュールを考えているということです。

アウトラインというのでしょうか、新基本構想策定の方針については、これまでの議論も踏まえて、およそこんなふうにとまとめたということです。

それを更に補足する形で、別添図1がございます。これは既に皆さん方にこれまでも検討していただいているかと思いますが、それから4つの機能、ベースを支えている「行動する市民力」。それからその4つのキーがばらばらに動くのではなくて、それを束ねてつないでいくような市民協働。前回とちょっと違うところがあるとすれば、仙台における創造の原動力というか、そういう「行動する市民力」がまちづくりとか都市づくりのモーターの役割を果たすというか、そんなことを少し強調した表現の仕方になっているかと思いますが、これは前回見ていただいたものと変わりません。

それから、別添図2についても前回見ていただきましたので、これについてはよろしいかと思います。この図を描いたときに、私もこれで満足しているわけではなくて、これを見て、先ほど言ったように、特にアジア諸国の成長力とかパワーとかバイタリティーをうまく仙台、東北に取り込んで、私たちも成長していくというイメージがうまく表現できているかどうかについては、まだちょっといろいろ検討したほうがいいのではないかと思うんですけれども、言いたい趣旨というか、表現したい内容はそんなことです。

それから、次の追加資料は仙台の都市イメージを新たに作成していただいたものです。基本的にはそこに書いてあります4つの大きな、別添図1で言うと木になっている部分を、花や実で表現し、もう少し具体的にわかりやすくしているということ、それから一つの木に例えながら、その木の中でそれぞれその土壌の部分、それから木の部分、それから木の中央には市民、企業、行政が連携協働していくという表現の仕方、それをもう少し一般の市民の方にもわかりやすく理解できるような形で表現している図だと思います。これは新たに付け加えたものです。

それから、別添図3をご覧ください。これは前回、小野田委員から提案いただいたものです。要するに「行動する市民力」といったようなもの、それから前から出ているその4つの大きな柱というか、別添図1でいうと木に当たる部分、それから更にそれを取り巻く部分という形で、この「行動する市民力」をもうちょっとダイナミックでわかるように概念化して表現してみるということなので、これは新しい図です。また、後ほどこの図についてもいろいろご意見をいただければと思いますけれども、これまでではどっちかという「行動する市民力」という図自体がちょっとスタティックな感じ、あるいは今まである資源を何となく組み合わせて新しいものをつくっていくという形になっているので、全体として大変スタティックな感じだったんですけど、それに比べると随分ダイナミックで、しかもお互いのキーコンセプトとか大事な部分がかなりよく表現されている図になっているという印象を持ちます。

次の別添図4は、都市像の変遷と新しい基本構想におけるキーワードですけど、これは従来からずっと出しているもので、基本的に中身は変わっていません。これまでの既存の計画、それから仙台市都市ビジョンも踏まえた上で、右側にキーワードを幾つか列挙しています。これも、ここに列挙されているキーワードだけで本当によいかは議論が必要ですし、これから実際に起草をしていく段階で、もっと重要なキーワードがあるという話があれば入れていただいたほうがいいかと思っています。

それから、別添資料1は一つ一つ細かく説明はできませんし、今日は説明する必要はないかと思いますが、現行基本構想の検証資料というもので、これは前からずっと出ているものです。特にこの資料の中で一つ一つ全部、本当は点検、確認しないといけないのかもしれませんが、大事なものは左の下に書いてありますように、施策の基本方向の体系にかかわる着眼点について斜体で書かれている部分があります。この斜体で書かれている部分については基本構想の中で意識して、そこはしっかり書いていかなければいけない部分ですので、その部分には特に注目しておいていただきたいということです。ただし、この資料自体はもう前にも出ていますし、その前に出た資料と中身は全然変わっていないので、どこが特に基本構想の中でしっかりと書いておかなければいけないかということだけを、ご確認いただければよろしいかと思います。

それから、最後になりますけれども資料2です。これはあくまでもたたき台として、新基本構想、先ほど説明をしました4つの部分から構成されているわけですが、4つの部分の中に都市像というのがあります。都市像につきましては、少したたき台を用意して、大体こんなイメージで都市像の部分を書き分けていきますので、これについても目を通していただいて、何かお気づきのことがあればと思いますけれども、これは

今日ここで何か決めてしまうというものではなくて、おおよその都市像のイメージとしてこんな書き方でこんな構成を今考えていますという、そんな程度の理解でとどめておいてください。

都市像の頭のところには、「未来に恵みと希望を伝える仙台」という形で、幾つかその都市像の一番ベースになる部分、前提になる部分、それから大事な部分を列挙するという事になっています。その後、先ほど出てきました四つの将来像を書いていくのですけれども、この書き方自体は先ほども申しましたように、市民一人一人が個々の行動を起こすというか、あるいはその行動とかその目指すべき都市像というのが、私たちの市民一人一人にとってどんな意味合いとか価値とかを持っているか、あるいは影響を持っているかという書きぶりにして、これまでの現行の基本構想とはちょっと違う、もっと市民に身近に受けとめられる書きぶりにしていったらどうかということです。

例えば の「すべての人が心身ともに健やかに心安らかに暮らしができるまち」というところで、例えば「人間の尊厳を大切に、多様性を認め合い、支え合いながら共に生きることができる」という表現で何が可能になるかとか、どういうことをそこで一人一人の市民が実感できるかという書きぶりで、ずっと統一したトーンでやってみたらどうかということです。

一つ一つのことについては、これからまだ検討の余地が十分あると思いますので今日ここで何か決める必要はないと思いますけれども、同じような形で の「地球環境を守り身近な自然に親しむ暮らしができるまち」という形で、ずっと重要な項目を幾つか列挙してあります。

裏面に行ってください。

は「東北全体の発展を応援し先導して世界とつながる暮らしができるまち」というところです。このあたりの書きぶりについても、先ほど冒頭で申しましたアジア諸国を始めとするつながりの問題、それからここでは一応、南北・東西の地下鉄を基軸として云々という形で、特に東西線の問題も含めて、そこでの都市構造のあり方を少し議論しています。

それから最後の部分は、特に「未来を担う世代を大切に育て互いに学び合う暮らしができるまち」という形で、そこにあるような大きく四つの論点を出しています。

この資料2の都市像につきましては、大体こんなイメージで都市像をまとめて書き分けたらいいのではないかという、先ほどから申し上げているように、あくまでもこれはたたき台ですので、これについてはこれからもっといろんな手を加えることになるかと思いますが、あわせてご意見いただいたり議論していただければと思います。

一応、前回の起草委員会を受けて、事務局、それから大村先生ともいろいろ意見交換をしながら、今日の起草委員会の中で、策定方針として皆さん方に議論していただきたいということです。中心は、今、説明しました資料2よりも資料1と、それからそれに添付されている図や資料を今度の25日の審議会で委員の皆様方にも検討していただきたいということです。主にその資料1を中心として、もし時間が許せば資料2についても少し皆様方からご意見をいただきたいということです。

私からは以上です。

それで早速ですけれども、少し資料１の新基本構想策定方針あるいはそれとの関わりの中で、今、説明しました幾つかの絵や図、添付資料について少し委員の皆様方からコメントをいただければと思います。

お願いします。

小松洋吉委員

今までの議論を踏まえて大変わかりやすくまとめられていると思います。委員長は、大変ご苦勞なさったのだろうと思います。非常にわかりやすくできていると思います。

そこで二、三ですが、感想を含めてですけれども、まず一つ、策定の趣旨に含まれていると思うのですが、資料２のたたき台には安心して生活できるというのがあります。策定の趣旨のところにも私は何か入っていてよいのではないかと、あるいは入っているのかもしれませんが、１点です。

それから、２つ目の都市像のところで、私は今まで市民行動と言ってきましたけれども、「行動する市民力」ということで大変市民の目線からして非常にわかりやすい言葉だろうと思います。この点で前回、柳井委員の御意見だったと思うのですが、市民力を生かすシステムというか組織がなければいけないということに全く同感です。一つそのところがポイントに、「行動する市民力」をどういうふうに市民のエネルギー化を図っていくかというときに、システムが一つ大事なことではないかと思います。

それから３点目に、次ページの４の基本構想の推進というところがあります。ちょっと繰り返しになりますが、このところに「行動する市民力」を育てるという意味では、この間大変素晴らしいお話をいただいて、中間組織的なものがよいのかどうかはわかりませんが、「行動する市民力」を生かす、あるいはエネルギー化とでも言いましょうか、そういうシステムはとても大事だと思いますので、何かどこかに入っていればよいのではないかという感じを持ちました。

以上です。大変ありがとうございました。

大滝精一委員長

ありがとうございました。ではその辺のところは少し検討したいと思います。

小松洋吉委員

基本的にはよいと思います。

大滝精一委員長

ありがとうございます。

どうぞ、ほかの委員の皆さん方も。

当面、資料１に限定して、それからそれが終わったら資料２にも行きたいと思います。

どうぞ、間庭委員、お願いします。

間庭洋委員

資料１の取りまとめ、どうも大変ありがとうございました。イメージが非常にぴったりにきたような感じがします。

一つ、これは皆さんのご意見を伺いたいのですが、この資料１の表側の大きな の起草にあたっての基本的視点のところにも、多分資料２やその他にもちょっと出てくるんですが、子供たちのことに対する表現の投げかけが、みんな未来とか将来という形になっているのですが、それも含めてやっぱり現在の生きている青少年もしっかりとらえて表現しないと。何か将来だけの話、将来の子供たち、次代を担う子供たちみたいな位置づけだけではどうかと。現在性をもっと、１０年ですから出したほうが、表現をもう少し加えたほうがよいのではないかというのが資料１の、後で資料２にもそういった部分があるのですが、印象がちょっとありまして。必ずしも子供たちは未来の担い手だけではなくて現在いるわけですので、未来だけではなくて、現在も担い手の一員だと思えます。そういう意味で必ずしも未来という冠だけで時間を制約する必要はないのではないかと思います。これは皆さんの意見によりますけれども。

資料１については以上です。

大滝精一委員長

間庭委員からせっかくそういう問いかけがありましたが、皆さんいかがですか。

庭野賀津子委員

私も今の間庭委員がおっしゃったことと同じようなことを考えていたのですが、資料２は後からということでしたので、そのときに述べようかと思ってはいたんですが、この資料２とリンクして資料１があるわけですが、ここの中でやはり今の子供たちの教育の充実とか、それから確かな学力をはぐくむということをもっと入れてよいのではないかと感じております。やはり学都という言葉を持ってくると、今までずっと学都仙台という言葉が使われてきているわけなのですけれども、学都仙台というと、どうしてもアカデミックな部分といいますか、高等教育が中心に据えられているようなイメージがあるわけですね。だけど、やっぱり確かな学力をはぐくむためには、もっと初等教育から力を入れていかなければいけないわけで、今いる子供たち、幼い子供たちから、教育というのは何も子供だけが対象ではなく、広くとらえればもっと成人まで生涯教育ということにもなりますけれども、いずれ子供たちにも確かな力とか、確かな生きる力とか、その力の元は学力だと思うんですね。そういったところをはぐくむ人づくりを、もっと視点としてここで打ち出してもよいのではないかと考えております。

大滝精一委員長

同じ質問ですが、ほかの委員の皆さんいかがでしょうか。間庭委員から提起があった問題ですけど。

間庭洋委員

ここの中に、「行動する市民力」とありますけど、ここには、今いる子供たちも含ま

れているという意味合いですね、とらえ方としては。提起したいのは。

大滝精一委員長

どうぞ。

大村虔一会長

子供がコミュニティの一員なのか、あるいは一員ではないのかということは、やっぱり大切な要素だと思うんですね。教育の問題で今大きな問題になっていると僕が思うのは、やっぱりコミュニティの一員としてコミュニティに参加していないというか、知識としていろいろなことは学んでいるけれども、体験を持って地域の人達と何かいろんなことをやっているということが足りないということは、先ほどの「行動する市民力」を育てるという意味ではいろいろ課題があるかと思いますので、先ほどの間庭さんのご発言、なかなかよいご発言だと思っておりまして、できるだけ学都というものを、ハイエデュケーションの世界の話のようにも見えるけど、本当に学んでいくというのを小さいときからそういう位置づけにして、そしてそれを社会の一員として学んでいくみたいな話が入ると、相当よいのではないですかね。

大滝精一委員長

それでは、その辺のところは、先ほど間庭委員からもご提案があった形でもう少し。それから「行動する市民力」も、子供とか現在いる若年層の人たちに対するとらえ方とか取組とかということも、わかるように記述していく形で、もう少し書き方を変えてよろしいですか。

(はいの声あり)

大滝精一委員長

では、そこは少し工夫してみましょう。

小松洋吉委員

策定の趣旨のところに、今出た子供のことは、何か表現があってもいいかもしれませんがね。表現をどうしたらよいかということはあるんですが。

大村虔一会長

この間に言ったことと同じになるのですが、今の時点はどう見るかということ、やっぱりターニングポイントというのが一番大きいと思うのです。20世紀の間に人口がどんどん増えてきて、国でいうと4,500万とか5,000万ぐらいからばーっと増えてきて、1億2千万くらいまできて、それがまた100年ぐらい経つと、もとに戻るという状況。つまり曲がり角で非常に変わってくる。僕が何十年か取り組んできたまちづくりのプロジェクトというのは、大体計画がうまくて実現したというよりは、人が増えていくプロセスの中

で経済が活性化していくのですよね。活性化していく経済の中でいろいろなことが自由にできたというよさがあったのが20世紀で、やっぱり人が少なくなるとそのところは違ってくる。そうすると「行動する市民力」というのは格好良いことでもあるのだけれど、そういうものの力を借りないと本当に生き生きした暮らしなんてつくれないよという差し迫った話も、本当は片一方にあるはずなのです。そういう時期に、元気な市民をどうやってつくっていくのかという話だという気がするのですけれども。

小野田泰明委員

まとめていただいて、非常に方針というか何か出口が見えているという感じがしました。

そうなのですが、一つ申し上げるとすれば、策定の趣旨で、今課題はたくさんあると書いてあります。お金もないし、人口も減る。アジアのさまざまな追い上げもあるし、低炭素化もある。その中で、課題を解決するのが都市像の2段落目で、「行動する市民力」によってそれを解決していきますという力強い宣言になっていると思いますが、今、大村先生がおっしゃったことのパラフレーズですが、「行動する市民力」にすべて縮減されていて、それが魔法のつえのように聞こえてしまうのも難しい。むしろ、今の市民は給料も減って、自由になる時間もなくて、なかなかきゅうきゅうとしている現状の中で、どうやってそういう余裕を持った行動をする市民になれるのか、これが市民からするとなかなか大変な宿題を背負っていると受けとられるのかもしれないとも思いました。それは反省的にですけれども。

それで、やっぱり厳しい現状というのは、今お話があったように、教育と雇用、福祉あたりに出てくるわけですが、やっぱりみんなサポートするに当たって、一つはやる気が出ない、それから技術がない、それからチャンスがないというあたりがあると思う。やる気、希望を持てないというのは、やっぱり何かビジョンがちゃんとしていないということもあるし、それから時間もないということでやる気も出ない。二つ目の具体的なスキルについてはかなりサポートはできると思うのですが、3つ目のチャンスがないというのはこの経済によるような話で、具体的なスキルをサポートする、ともに学べる社会をつくりますと、コミュニティを大事にしてそこで大事にされた経験によってやる気とか希望をサポートしますと、そういうことなのかもしれないけど、何か「行動する市民力」をかん養するための仕組みについてちょっと踏み出した宣言というか記述というかコメントがないと、これはなかなかその先がないのではないかと思います。

これは、今、日本のすべての自治体が直面してだれも解けない問題なので、別にこれを解かないと先に行けないと言っているわけではないんですが、そのあたりをもうちょっとわかりやすく書き足す問題とか、だからこそ、前から申し上げているように、教育委員会が所管している教育と、各区役所が所管しているコミュニティに関する分野を、横串でつなぐ。それから私の経験ですと、市営住宅を所管する都市整備局です。都市整備局、区役所、教育委員会、それに福祉が入りますけれど、そのあたりを束ねて、持てるものや資源をお互いに共有しながら市民を支援していくことが見えないと、やっぱりこれは絵にかいたもちになると思います。だから、「行動する市民力」が大事です、

「行動する市民力」をかん養するために本市はこういうふうに市民を応援します、したがって企業も痛みを分かち合ってほしいし、市民の皆さんもそれなりに支えるというか共感していただきたい、そのため市は何を打ち出すのかというところがもうちょっと見えるような書きぶりだと、よりすばらしいのではないかと思います。

柳井雅也委員

小野田委員の意見をちょっと敷衍する形になるかもしれないのですが、先般の話で地域経営会議とかプラットフォームという言葉でお話をしていたのが、その部分に該当してくると思うのです。それで恐らく大村さんが言われたのは20世紀の地域づくりとか都市経営とかで、そういった部分を別な言葉で表すと都市間競争に基づく差別化。いかに差別化していくのかという競争原理です。21世紀は差別化からやがて個性化、あるいは個別化に入っていくということで、むしろ自分たちの光をどう放つのかというところに論点が移ってきていると思うのです。そのときやっぱり重要になってくるのは、都市経営における効率化をどう達成するかということなのです。

私ども、先回の議論で出てきた地域経営会議とか、あとハードの整備については上下分離方式とか、あるいはPFIの導入とか、そういったものは全部効率化の問題なのです。そして、その効率化は単にコストカットの効率化ではなくて、一つの効果が非常に大きなシナジー効果を生み出していく意味での効率化なんです。つまり人口も減ってくる、人材も限られてくる、そして一人一人が市民力とか、あと民度というものをちゃんとつけていかなければならない。これはもう緊急の課題です。だから、そういった中で効率性をどう追求していくのかということで、実は今言った差別化から個性化、そしてそれに伴う効率化というものが非常に重要になってきていて、そしてその後に新機軸として仙台の都市経営は何なのかを更に付加していかなければいけないと思うのです。

したがって、今、我々が議論すべきことは、今言った地域経営会議であるとか、あるいは、例えば公共投資の整備の仕方であるとか、そのあたりをちゃんと合意形成をしておいて、そしてそれを別な表現で、むしろ、ダイレクトな表現をすると基本構想としてはなじまないというのでしたら、そのこのところの仕組みを考えていきますとか、そういう言葉の表現とかニュアンスをにじませておく。そして、仙台らしさを最終的には求めていくのですということを言っていけばよいのではないかと考えております。

小野田泰明委員

先生がおっしゃるのはNPM、ニューパブリックマネジメントの話ですか。

柳井雅也委員

要するに、人の活動の面では、いわゆる地域経営会議ということで、NPO一切含んで。例えば、場合によっては、TMOなども入ってきます。そういったものを含んだ組織体というのは、やっぱりいろいろなところでインフレーション的に立ち上げていかないとだめだろうということです。そうしないと、市民はなかなか参画するチャンスを得ないということだと思います。

小野田泰明委員

行政の効率化という概念と僕はちょっと違うと思っていて、90年代に行政の効率化の非常に大きな後押しする概念になったのはNPM、ニューパブリックマネジメントです。市民を顧客として位置づけ、行政単位内の効率化を非常に図り、行政がやる必要がないものについてはアウトソーシングして、先生おっしゃるように中間集団を膨らませていく。そのとおりなのですが、実際、中間集団をつくってそれがどうなったかというところ、TMOもうまくいっているものはありますけれど、なかなかうまくマネジメントできない。理由は二つぐらいあります。それは、実際のビジネスにならないから、血液としてのお金が回らないからうまくいかないというものもあるし、特区をつくっていたりするところは別ですけども、やっぱりどうしても従来の行政の枠組みの上にそれを立ち上げてしまうから、従来の都市計画、都市整備の方針とのギャップがあります。また、こちら側には従来の商店会の枠組みがあって、その中でなかなかうまく位置づけができないということで、今の仕組みを生かしたままNPMを上に乗せる形をとり、予算だけ減らしたから、なかなかイギリスでドラスティックにやっているようなNPMのマネジメントが日本では働かなかった。もうこれは10年ぐらい前からずっとやられてきて、今、それではちょっとまずいので、もうちょっと別なやり方あるのではないかという時代に直面しています。だから、効率よくやらないといけないことは確かなのですが、もうちょっと違う枠組みでやるべきと僕自身は思っていました。

柳井雅也委員

僕がさっき言ったのはそこなんです。いわゆるコストカット的な効率性ではないと言ったのはそういうことなのです。だから、地域経営会議というのは、どちらかということそういった市が作り上げるような組織体ではなくて、むしろ市民の側から出てきて、それに対して市がどうコミットしていくかは各地域における特性によって変わってくると思うのですが、やっぱり探っていかなければいけないテーマであることは間違いないと思います。

だから、小野田委員がおっしゃられるような、特にTMOというのは9割以上は大体失敗していますので、それを想定して言っているわけではないということです。

小野田泰明委員

例えば、今、行政の中で具体的に決めて、あと市民に協力を求めるような部分、もう少し端的に言うと、市の大事な建物の改修や建築という、だれがやるのかみたいな話は割と市の中で決めているわけですけども、それを市民に参画してもらって、若しくは子供たちが大村先生がやっているようなワークショップをやりながら、こういうのは大事ですと、それを公開のコンテストで広く才能を募って、その募った才能には市民と一緒にワークショップをしながら建てなさいと言うとか、その分のワークショップの部分の持ち出しは出ますけど、それでもよいものができれば回りますよというふうに、市が今まで決めて発注していた部分のある部分については、その意思決定に市民が参画する。

参画することによって、大事にされている、自分の意思決定がやっぱり市に非常に影響を与えるんだ、人として尊重されているんだということが市民に戻ってきますから、さっき申し上げた一番難しいやる気というか希望の部分は、東京とか大都市では無理ですけど、仙台ぐらいのコンパクトなところであれば、直接参加型のそういう仕組みができると思う。

そういうことで、そのできたもののクオリティーも多分上がるし、その運営も、意思決定に参画したから彼らも責任を共有して、市もマネジメントについては楽になる、そういう善循環ができる仕組みをやっぱり具体的ににとっていくべきだと思っていて、そのときの後押しになる憲法にこの基本構想がなっていけばよいと思います。今の基本構想を読んでも従来型の仕組みをとってもいいし、そういうことをやってもいいし、どちらでも採れそうな気もするのです。そうではなくて、新しいやり方をやらないといけないというか、お金と時間に余裕がないときは従来型でよいですけども、できるだけ余裕がある限りは新しいやり方を採りなさいという、もうちょっと背中を押してあげたいというのが私のかなり強い意志です。前回は申し上げましたが、現場はかなり疲弊しておりますので、特にやる気のある人が疲弊しているのは僕は非常に危険だと思っていて、やっぱりやる気のある人が尊敬されて、また次の仕事につながっていくというのが、仙台の活力をうまく回していく基本ではないかと思っていまして、やっぱりやる気のある人を孤立させないような基本構想であつたらよいということで発言させていただいた次第です。

柳井雅也委員

ちょっと具体的なイメージが僕もわからないのですが、地域経営会議というのはプラットホームという役割を持たせていますので、僕が先回お話ししたのは、恐らくそのところの議論をある程度詰めておかないと、仮に、審議会に持っていったとき、市民力と出ているが、具体的にどうなのか、どこで担保をとっているのですかと、こういう表現したとき、そういう質問が出かねない。だから、そこは少しその仕組みなり参画の仕方なりをもうちょっとここで議論しておいたほうがいいのかという気がします。

大滝精一委員長

「行動する市民力」の重要な論点の一つは、それをむしろ促していくとかということ、市民力を育てていくとか向上させていくために何をしたらよいかという論点、それからこれは私自身は少しそういうことを意識して書いているつもりではあるのですが、今、小野田委員から議論があつた論点とか、私の意識しているところだと裏面の4の基本構想の推進の3行目から4行目ぐらいのところに「特に市役所について政策形成過程における市民参画のあり方に関する議論を深める」という書き方をしているのですね。もちろんこの2行だけ読んでそれがぴんと来る人と、何だ、当たり前のことを言っているのではないのと思う人と、受け取り方が全く違うと思いますけれども、私自身は、今、小野田委員が言ったことを相当意識してここは書いているつもり、中に入れていくつもり

ではあるのです。

だから、そのところの要するに市民参画ということとか、あるいは市役所における、あるいは市における政策形成過程とか意思決定プロセスの中に、そういう市民が入ってくる余地を広げていくとか、柳井委員の言い方をすると、要するに参画できる場のつくり方とかプラットホームの設計の仕方とか、あるいは場とかプラットホームといってもまだ依然として抽象的なので、具体的にどうしたらよいかという話とか、確かにその辺の議論はやらなくてはいけないのですけれども、ちょっとここに書くときにどこまで書くことができるかということはあるのです。あるのですけれども、多分具体的な話になったとき、特に基本計画になったときには、そのところの話は、では10年で何をするのですかという話が当然出てきますから、かなり具体的なイメージを与えてあげないとだめだと思います。ですから、その意味で、今、柳井委員がおっしゃったことは非常に重要な論点だと思います。

大村虔一会長

市民力だけに目を向けていても仕方がなくて、多分何をキーワードにしたらよいかわからなくて、結局は問題提起するだけになってしまうかもしれないんだけど、連携みたいなことはものすごい大きいキーワードになるのではないかなと思っている。僕はまちづくりが商売なのでまちづくりの話ですと、今まで公共サイドが、道路なら道路をばーっとつくて、後で民間でうまく建物をつくりなさいといえば、大体みんな競争して張り合って何かやるとある程度よいものができるという状況だったのだけれど、だんだんそうではなくなりかけているわけですね。そうすると、ではどうやってよいまちにするのかというのは、ではだれがどうかかわっていけばいいのかということ进行调整しなければいなくなって、役所の中でも今までの土木だとか交通だとかいう人たちが、それぞれ大体大枠を決めて取り組めばうまくいっていたのだけれど、もうなかなかそうはいかなくなって、相当密にいろいろなことをやらなければいけなくなっているという状況が起きてきている気がするのです。

それから、これは僕、一番頭が痛いんだけど、仙台市と仙台市の周辺の連携というあたりが多分相当大きくて、大ざっぱに、東北7県議論すると大変なので、宮城、山形、福島ぐらいをとると、この30年ぐらいの間に仙台市の人口はその中のシェアで多分2割5分は軽くいくのですよね。だから、4分の1ぐらいが仙台にいるという状況はすぐそこに見えています。それだけほかの人口の減りが激しいというふうに多分動くだろうと一般的には言われているわけです。そういうときに仙台は何をするのか、今までは仙台の中でハッピーになる計画をつくて、いろいろなところと連携しますとか、海外から来た人ともうまく交流しますとか言っていればよかったんだけど、本当にそういうことだけでいいのか。やっぱり仙台がいてくれてよかったねと、みんなで支えてくれて、仙台もまたみんなを支えるみたいな話というのはどう書くのか。大変難しいテーマと思っています。

そのときの連携というと、山形と仙山交流をいろいろやっています。いろいろやっていて、あれは行政が始めたというよりは民間の中から動きが出てきて、だからそういう

意味では「行動する市民力」というものは行政区域を越えてもう動き出しているという一つの例かもしれないし、その連携みたいなものにどういう位置づけをするのかというあたりは、今回のテーマでは大きいと思うのですけど。

小松洋吉委員

この都市像の書かれている下から4行目の創造的な都市づくりの中に、恐らく委員長も多分そういう趣旨、気持ちは含まれてはいるのだろうと思うのです。まずは行動、そしてその力を強めていくための連携、システム、スクラム化みたいなのはこの中に感ずることはできると思うのです。大変大事なことだろうと思います。

西大立目祥子委員

その連携についてはどのぐらいまで書くのかというのも一つ大きいと思います。大村先生がおっしゃったように、本当に仙台がこれから東北に対してやらなければいけないことはすごくたくさんあると思うし、やはり「行動する市民力」だけでこの課題は解決できないと思うので、市民と市役所の関係もあるし、私は市民活動をしていて町内会とNPOがどう結ばれていくか、そこのかかわりもまだ全然できていないですね。だから連携というキーワードは挙げておく必要はあると思うのですけれども、どこまで踏み込んでそのプラットフォーム的なところを描くかというのは大事かと思います。

柳井雅也委員

でも、基本構想はそこまで入り込まなくてもよいと思うんです。漠然と表現して、必ずしも取っ掛りだけ入れておけばよいのかと思うのです。

小野田泰明委員

僕も、今、実際に町内会とNPOをどうつなぐのかというのはすごい大変です。

間庭洋委員

まるで宮城県と東北5県との間柄みたいで、結局何でもそういう次元なのですよ。間柄が形成されていないと、お互いどこまでどういう間柄で話したらいいかわからないから。だから仙台が、さっき大村先生おっしゃったように、東北のよく兄貴分だとかけん引するとか、リーダーシティとかというスローガンはあるのですが、では具体的に何をしたら。いや、負担金をその分、応分に出していますということはあるのだけれど、役割としてどうなのかというと、市長会の会長をやっていますということはあるかもしれませんが、やっぱりそういった部分で実質けん引、リードするということもあわせて言うならば、やっぱり奉仕するといいますか、東北の全体のことを考えて仙台がいろいろなことを行動していくとか、あるいはさっきの例と同じように、やっぱり間柄がちゃんと形成されていないといけない。

行政は、比較的、特に県なんかそうですけど、お互いにかみしもを着合った同士で仲良くしようと言ったって、なかなか難しいのが実情なので、この「行動する市民力」み

たいな、市民だとか経済界のほうがむしろ東北とは仲が良いという事例はいっぱいありますから、むしろ行政がそこを一緒になってやったほうが東北とは仲良くなれるし、そういう間柄をしっかりと継続的に形成していくことによって、いろんな課題がそこで取り上げられたり担い合ったりしていったって、信頼関係が深まれば、名実ともに仙台のほうへのいろんな頼りだとか、あるいは一緒にやろうよという機運が高まっていくと思うのですが、多分、今、そういう間柄というのは継続的には余りないと思うのです。そういう中でリードをしていくとかけん引するということは、事実上負担金をちょっと多くするとか市長会の会長をやるぐらいしか、プラスアルファぐらいしかできないのではないかなと思うのです、間柄がなければ。それを、「行動する市民力」の中でも力を借りて一緒にやっていくことによって、ここの絵にかいてあるようなことに向かっていけるのではないかなと思うのです。

小野田泰明委員

大村先生がおっしゃった話と間庭委員の話にちょっと啓発されて思ったのですが、大村先生がおっしゃった連携はやっぱりキーワードだと思うんです。やっぱり「行動する市民力」をサポートするために、市は自らのシステムをフレキシブルとか相対化してちゃんと支えます、相互に連携しますという横串の連携をきちんとうたってほしいと、それは改めて思います。

もう一つ、そういう部局間の連携のほかに、今、地域間の連携という話がありました。地域間の連携については、これは仕組みが違うから、それはなかなか連携するのは難しいのですけれども、できるとすれば何かプロジェクトベースで連携するということが多分あって、そのプロジェクトベースで連携した経験をもう一回フィードバックして、仕組みをもう一回ブラッシュアップしますというプロジェクト先行の仕組みがあって、仕組みをちゃんとつくって連携をしますというのではなくて、プロジェクトを先行させて、そのプロジェクトを取り込んでしたたかに仕組みをもう一回動かしていきますという順番ではないかと思っています。

例えば、最近山形のドキュメンタリー映画祭の人たちともお話しするのですけれども、すごくよい企画です。山形ドキュメンタリー映画は圧倒的にすごい。プロジェクト側もすごいし、やっている人たちの熱意もすごいのですけれども、あれはもう仙台では絶対まねできない。仙台は何かフィルムコミッションで対抗しようとしているみたいですが、競い合うのはよいけれど、そうではなくて山形を応援して、山形でやったことを巡回展みたいに、仙台に来たり宮城に来たりするのを応援しますとか、その宣伝でサポートしたいときには我々も積極的にやりますと、サポートしますみたいな、そういうプロジェクトベースで引き継いで、ではそのときに情宣のネットワークはちゃんとしたほうがいいねとか、こっちで企画したものをこっちで巡回するときには費用分担はどうしたらいいのか、仕組みの何が障害になっているのかというのが明らかになるから、それを仕組みにフィードバックしていくとか、そういう似たようなことがいっぱいあると思うのです。いっぱいあり過ぎると疲弊しちゃうけど、幾つかパイロットプロジェクトを都市ごとに策定して、それをフィードバックしていく仕組みを内包すると考えていったって、

大村先生がおっしゃった連携ですね、市民力を支える連携と、あとは縦割りをやわらかく横に連携させる地域を越えた連携についてはプロジェクトベースというか、プロジェクト先行で仕組みにフィードバックをします、この2つのやり方を持って連携を実現しますとか、そんなことをとても書けないと思うけど、それぐらいの熱意がないとこの厳しい21世紀は渡っていけない、克服できないのではないかと思います。

柳井雅也委員

連携の類型というのでしょうか、専ら人の連携という話で経済の連携が言われているのですが、都市機能からの連携ということもやっぱり議論しておく必要があって、恐らく3つぐらいの分類が可能だと思うのです。一つは、仙台という都市の大きさが持つ拠点性。日本でいえば東京みたいなものですが、一極集中なのです。それが持つ勢力圏ということで、仙台に例えば立地する企業であるとか、あるいは行政機能、例えば経済産業局とか、そういったものを持つ勢力圏としての仙台の連携というのは一つあるのだと思います。これはすごく嫌がられる話なのですが、実際にあるということです。

それともう一つは、よく首都機能移転で議論されていた分都論みたいな形で、例えばお互い正と反、あるいは明と暗というお互いが補完するような関係ですね。仙台が都市化が非常に進んでくれば、農村空間とか農村地域におけるさまざまな宝とかあるいは農産物、何でもいいのですが、そういったものをお互い補完し合うような関係での連携というのが、地域間の連携の仕方としてあります。

あともう一つは、先程言った首都機能の移転論でいうと転都論という考え方があって、例えば、東京からずっとリニアを走らせて、松本には外務省とか、名古屋には経産省みたいな形で、本来東北が持っている機能をずっとばらまいていく、そしてそれをネットワーク等の力を借りて連携させていくという形。言ってみれば正と反というのはその引き合う関係ではなくて、赤白黄色のようにそれぞれが光を持って分立して、それが連携をとっていく。例えば、商業機能は仙台だったら、工業都市機能は山形の米沢であるとか、そういった連携の仕方をどう考えていくかというのがあるのです。連携というとき、人の話が専ら、今、されてきているんですけども、むしろこういった基本構想の中にもう一つ、地域間の連携、いわゆる都市地域の連携とか、地域論におけるような地域間の連携というものをもうちょっと議論しておく必要があるのかと思いました。話題提供ということでちょっとお話しさせていただきました。

間庭洋委員

東北の中にいろいろな地域の資源が歴史的、文化的にあったり、その後に備わったものもあると思うのですが、そういういろんな資源をお互いにネットワークすることによって強みを生かし合うという方向が、仙台が果たすべき大きな役割の一つではないかと思うのです。

東北には、自然を始めいろいろな資源がたくさんあります。人的な資源もありますけれども、そういったものをやっぱり地域の特色、強をもっと生かせるようなことをネ

ットワーク化していくことのほうが、方向性としては、ある程度あるがままで参加して、それがもっともっと強みを生かしていける、それが雇用だとかその地域で暮らし続けていける大きな要素の一つになるということのほうが、基本的には東北には合うのではないかと考えています。

あとは、ここの成長するアジア諸国の云々というのは、更にそういったものに付加して考えていくテーマであるのかと。私は持論では前にも言いましたが、例えば自動車産業がこんなふうに岩手、宮城に集積するのであれば、対ロシアという戦略を考えた形でシーアンドレールみたいなものを仙台市もサポートするという、前にも発言しましたが、そういった視点もさっきの前段の話に加えていくのがこういったことなのかなと思います。

大滝精一委員長

書きぶりはなかなか悩ましいですね。でも、現実にはかつての10年に比べて仙台の持っている意味とか役割というのは、事実上非常に大きなものになってくるし、それからこの言葉もいい言葉かどうかわからないけど、とにかく圧倒的な吸引力を持って存在するということが否定しようがないのではないかという気がするんですね。つまりこの部分は建前と本音を書き分けるみたいな話になりかねなくて。でも、現実にはそういうものが相当あるし、多くの人たちが実は暗黙のうちにそのことを了解しているんだけど、でも実際に仙台のこういう計画の中にはなかなかそれが表になって出てこない。それが本当にどこまで意味のあることかというのは、ちょっと何と言ったらいいいのか私自身も名案があるわけではないから。それから、仮に私たちが書いたとしても、「それ何」と周りの人は受け取るだけなのかもしれないんですけどね。ただ、現実と建前の部分が余り乖離していくというのは、本当はよくないのではないかという感じも一方であるのです。

間庭洋委員

北海道が我々よりもっと先に行っている例と考えられると思うんです。北海道自体は600万人ぐらいいて、札幌圏に圧倒的に、東北における仙台以上に集中が激しくて膨張している。だけど、ブラックホールみたいな形で、悪いけど札幌圏以外の北海道はどんどん吸い取られている。札幌に雇用とか就職、暮らしに行くのでなければ、あとはもう本州しかない、東京、首都圏などしかないみたいな、大まかに言うとそういう状況ですよ。そういうもとで北海道の札幌以外の地域はどういう地域形成をしたらいいのかとか、そこで暮らし続けていく雇用その他どうしたらいいのかという命題、そして札幌圏はオール北海道に対するどういう役割を担うのかというところは、我々以上にもっと進んだ事例が強烈にあります。それを考えると、とても仙台がおっとりしてられない。

余り固有名詞を挙げてはいけないけど、秋田駅の真ん前のイトーヨーカドーが撤退するわけです、年内に。壊滅的な状況になるわけです。秋田は元々経済も、今、大変ですけども、北海道のそういう状況がひしひしと迫ってきているわけです。そういうことの中で、やっぱり仙台や宮城県が果たす役割というのは経済的にも行政的にもかなり大

きいものあって、相当本気でこれを位置づけて取り組んでいかないと、これはもちろん行政だけではなくて、仙台が札幌のように膨張することはあったとしても、東北自体がもう相当疲弊してしまう。一部福島、北関東は別にして。ということが非常にアップトゥデートな宿題として、目の前にぶら下がっていると思うのです。それぐらいのつもりでこれを押し立てていかないといけないのではないかとと思っています。

大滝精一委員長

ちょっとこのところは、なかなかこれを書く書きぶりとか、それから事の重要性は皆さんが多分認識されているのと余り変わらないと思うのですが、でも、どういう書きぶりをしていったらいいかということについては、ちょっといいアイデアはなかなか今すぐ出てこないという感じなんですけれど。

間庭洋委員

これは資料１だけではなくて、その後のほうにも関係してくるのですが、ここで全部という意味ではないですけど。

小野田泰明委員

別にたいしたことではないけれども、オランダがそういう多極分散型都市の相互分散のモデルとされています。ヨーロッパの都市は割とそういうところが多いのですけれども。我々オランダで知っているのはアムステルダムですけれども、実際オランダを動かしているのはロッテルダムだったりデルフトだったり。それぞれに産業化を進める場所と政治をやる場所と教育をやる場所。アムステルダムは観光に取り組んでいます。それぞれが30キロ圏、遠くて50キロ圏ぐらいでつながっていて、相互に連携している。そういうあたりが、なぜ日本でできないんだろうかと思いますけれども、それはやっぱり市民社会の形成と行政のエンフォースメントであったり、マスタープランでそれをかなり明確に打ち出しているというところで非常に大きな違いがあるというのが一つと、やっぱり基本的にオランダの例を見ると、流れているお金や人の流れもそうですけれども、大きなEUの流れに続いて流れているものが非常に大きいですから、その中で分散できるのはいいのだけど、東北のように流れている量がそんなにないところで地域分散というか、地域分担を掲げてどこまでやれるのかというあたりです。どうしてもアメリカ型の集中型にならざるを得ないのかもしれないかもしれません。

でも、僕は書く意味がないと思っているわけではなくて、やっぱり秋田なり山形なりとこういうふうに役割分担をしますということ、今一番余裕のある仙台が、全部を総花的に仙台に集めるのではなくて、工業的な部分は山形との連携で確保していくということとはもしかしたら言えるのかもしれないと思います。

大滝精一委員長

それでは、いろんなご意見いただいたのですが、とにかく今日全部それを解決することも当然難しいので、こういう議論があったことを踏まえて、それから当然のこ

とですけど、今の話の中のかなりの部分はこの後の基本計画、実施計画の中の、次の10年をどうするかという話にかかわっている部分が相当多いので、そちらの側でもいろいろ議論はできると思います。

それで、一応 25 日に出すということがあるので、当面この資料 1 の中の、今幾つか議論があったのですけれども、特に資料 1 の中で具体的にこういうところを少し修正したらいいのではないかという、どの部分をもう少し修正するないしは書き加えたらいいかというような、その辺の話をそろそろまとめておいたほうがいいと思いますので、皆さんから出していただけますか。

先ほど議論があったのは、この「行動する市民力」という中身とか内実のところですね。そこについては、もう少しそれをどう育てていくのかという話があったほうがいいのではないかという議論、それから冒頭に間庭委員からもありましたように、子供とか若年層の話が出てきているんだけど、これはもうちょっと現在の子供とか、それからコミュニティの中でも今のコミュニティの問題を意識した形で、そういうことがはっきり見える書きぶりにしたほうがいいんじゃないかとか、そんな議論は出てきたと思いますし、そこについては大方の皆さんから賛同を得られたんじゃないかと考えております。それ以外の部分でも幾つか議論があったかと思いますが、特にこの中でもう少し修正するとか、こういうふうな書きぶりに変えたほうがいいんじゃないかというようなことをまとめておいたほうがいいかと思います。

庭野賀津子委員

細かいところで、ちょっとよろしいでしょうか。

大滝精一委員長

はい。

庭野賀津子委員

先ほどからの議論で、やはり「行動する市民力」といいますか、アクティブ、ポジティブな人的資源がすごく重要であるということが打ち出されていいと思うのですけれども、2 番の都市像の 2 段落目のところで、仙台が誇る強みである「行動する市民力」と書かれてあるから、既にそのような市民力があるのだと、現存しているのだというイメージで読んでいきますと、4 番の基本構想の推進のところで、今度は「行動する市民力」を生み出し育てていくという表現になってきて、そうすると先ほどの強みはどうしたのかとちょっと思うのですけれども、既にあるものをバックアップし、さらに拡大し、また広げていくというニュアンスの書き方がいいのかと思ったんですけれども、いかがでしょうか。

大滝精一委員長

これはいかがですか。これまでの認識から言っても、仙台が持っているそういういろいろな市民力とか、それからこれまでのいろいろな市民活動とか、そういうものの実績

ということについては、これは前からそういう議論は十分あると思いますし、そういう意味で、ここが仙台の特長でもあるし、ある種の強みと言えれば強みというか、特長と言えれば特長という、そういう認識はあるかと思いますので、今、庭野委員がおっしゃられたような形で、少しそういう仙台の持っている「行動する市民力」をもっと、その強みを多くの市民に広めていくとか、多くの市民にそれが実践できるような方向に広げていくという、そんな形で書きぶりを変えていくほうがよろしいということですね。よろしいですか。では、そういうふうに少し書きぶりを変えましょう。

小野田泰明委員

今まで議論してきたことをこれにどう書くのかと言われるとなかなか、いつもこういうところで一番悩むのですけれども、こういうフォーマットに落とし込んだ瞬間に、問題化しているスタティックな組織そのものに回収されてしまうというジレンマがあるので、なかなかつらいのですけれども、やっぱり、大滝先生がここにすごく力を入れて書いたとおっしゃる、その基本構想の推進の4です。それはもうちょっと先生の気持ちというか熱がきちんと伝わる形で、 - 1の策定の趣旨の箇条書きみたいな形で、政策過程に市民参加のあり方に対する議論を積極的に入れるとか、大村先生がさっき言われた、連携を広くやっていくためにそういうことを少し考えていくとか、何か推進のための工夫というところの書きぶりをもうちょっと積極的に書けるのではないかと思います。

そのあたりで、組織というのが絶対、例えば3の施策の基本方向を見ると、組織というのはもう自明のことで、その市という組織が地域社会の形成をやって、循環型都市をケアして都市構造の形成にかかわっていきます。これは正しいのだけど、やっぱり組織自身もその在りようをちゃんと見直して発展的に動いていきますと。3というのは4と個別の問題ではなくて、4と3は非常にパラレルに、相互にフィードバックし合いながら、相互に発展していくという話ではないのだろうかと思いました。

大滝精一委員長

わかりました。このさっきの4の上から3行目、4行目のところは、こちらの側としては相当思いを込めて書いてはいるのですけれども、なかなかどこまで踏み込んで書くかという書きぶりが結構難しく、余り細かなところを書き始めると、これって何という話になっていったって、本当にこれが基本構想になっているかという話になってきますから、なかなか書きぶりは難しいのですけれども、そこは少し検討させてください。

それから、先ほど小野田先生からもあった連携というのがキーワードになっているという話があるので、その連携の話とこの市民力の話とは何かの形でうまく表現できるような書きぶりをここの中に入れておいたほうがいいのかという感じはちょっとするのですね。先ほどから議論があるように、連携という言葉自体も、いろいろな意味とかいろいろなレベルの連携の話をしているので、それを全部書き込む必要はないと思うのですけれども、その問題をちょっと絡めて言葉を補うという形で考えてみたいと思います。

ほかにはいかがでしょうか。

では、一応、今、幾つか出てきたところについて、少し修正、手を加えるということ

で、今度の審議会に出したいと思います。

これは、手を加えた部分についてはどうしますか。こちらで試案をつくって委員の皆さんに見てもらいますか。それでまた、更に訂正とか、ここはちょっと手を入れたほうがいいのではないかというご意見があれば、そこもできる限り、皆さんの意見を全部反映することはできないと思いますが、できる限り反映して起草委員会の提案として審議会に出す、そんな形でよろしいですね。

(はいの声あり)

大滝精一委員長

それから、余り議論ができなかったんですけども、幾つかの図があるんですけど、この追加資料についてはどうですか。別添図1から始まって、特に今度新しくつくっていただいている、行動する市民が主役という、左の上の仙台の都市イメージというのがあって、こういうのが市民の皆さんにも比較的わかりやすくという形でつくってもらっているんですけども、このあたりも含めて。それから、結構イメージとして想像しやすいのはこの別添図3という、小野田委員から提案のあったものに少し手を入れたものですけど、このあたりのところはどうですか。

折田総合計画課長

追加資料の位置づけについて改めてご説明させていただきますけれども、こちらの本日お配りした図は、委員長からご提出、今回提示していただきましたたたき台をベースにしながら、こちらの別添図1、図2、これは前回ご議論していただいたものと同じものでございますが、こちらの趣旨も入れながら、全体のイメージをつかんでいただくために、委員長からご指示いただきまして、我々のほうで専門の業者をお願いしてつくっていただいたものでございまして、こちらについてはまだ委員長も、でき上がったのはつい先ほどでございますし、余り中身をご覧いただいていない状態のものということをおあらかじめご承知おきいただければと思いますし、中身に関しましては、資料2をもとにしてつくりましたので、そういう位置づけのものであるということでご覧いただければと思います。

大滝精一委員長

ありがとうございました。

ただ、全体として見たときに、都市のイメージとか、それから基本構想、一目で見ればこんな感じですよというのは、これから市民の皆さんに発信するときにはすごく大事だと思うので、大事な図ではないかと思っているのですけどね。

ですので、この仙台の都市イメージというのと、それから特に別添図3あたりのところは、今度新しく出てきているものなので、ちょっと皆さんに見ていただいて、何かコメントとか感想のようなものがあれば発言していただけるとありがたいと思うのですが、いかがでしょうか。

江成敬次郎委員

これは市民向けのという、そういう意図ですか。市民に対して理解してもらう助けになるようにという、そういう意図なのですか。

折田総合計画課長

最終的にはそういう形を考えておりますが、ちょっと書き込んでおりますのは、まず審議会のご議論の中でも、こうしたポンチ絵というものでイメージが共有できれば議論も進みやすいかという趣旨で、若干細かい形のつくりにさせていただいております。

江成敬次郎委員

そうだとすると、多分ほとんど読まないだろうと思って、第一印象はそういうふうにしたのですがね。市民向けにわかりやすくというのであれば、やっぱり字の数がこんなに多いととてもわからないという感じが正直しました。前段の趣旨の、ここでの議論をとりあえず整理してまとめたと、まだそういう段階だということであればわからなくもないのですが、市民に対して発信するときには、もっとやっぱり簡潔にしないと伝わらないのではないかという気がしました。

大滝精一委員長

ありがとうございます。

西大立目祥子委員

あと、先ほどの4の基本構想の推進に若干戻ることにもなるのですが、やはり仙台市が総合計画、基本構想というものをつくって、市民に提案していくわけですよね。そのときに、この内容について市民と共有するためには、あなたが主役だと言うためには、やはり自分たちは何をするのかというのがもうちょっとこの中に盛り込まれていないと、本当の意味での共有にはなり得ないように思います。これを見ると、何か、突然あなたが主役で、寝ていたのに起こされて今日から頑張れという、何かハッパをかけられるような感じもあって、ちょっと待ってくださいよと思ったりもするのではないかなと思うんですよね。だから、連携の仕組みももちろんそうなのですが、こういう図の中に、だったら仙台市役所は何をしてくれるのか、私たちと一緒に何をするんだろうというところが、こんな企業と一緒に握手するだけではなくて、もうちょっと書き方はないものかと思いました。

大滝精一委員長

追加資料ですね。

西大立目祥子委員

追加資料もですけど、別添図1も。

大滝精一委員長

もう少しそういう、仙台市としてやるというメッセージが伝わってくるような方向と
いうか、それがあったほうがいいんじゃないか、握手しているだけでなく、もう少し
違うものがあっていいんじゃないかという話ですね。ありがとうございます。

小野田泰明委員

僕は、行政体としてはなかなか市民にこうやってくださいというのは直接的に書きに
くいから、まずこれが玄関であって、実際はこういうことをお願いしたいみたいな、2
段構成になっているのかとも思ったんですけども。僕もそれが気になって、さっきか
ら発言していますが、やっぱり市民が何をすればいいのか、何をすることによって
市はどういうふうと一緒に歩いてくれるのか、おれたちがリスク取らされるだけなので
はないのかみたいなことを緩和するような力強い宣言が欲しいと思います。その辺の役
割分担というか、この図面から見ると、どんな感じになっているのですか、市としては。

折田総合計画課長

なかなか、今、こういう役割分担だというのは難しいところはあるのですけれども。

小野田泰明委員

何か意図があるでしょう、それぞれに。

折田総合計画課長

この前、委員長ともご相談させていただきながら作業して、時系列の関係でも若干そ
れぞれ位置づけが違うものでございまして、この5枚を並べて見たときに、では、整合
性のとれた各図の役割分担ができているかということ、そうはなっておりません。我々は、
最終的にこの4つの図、これまでの議論の経過をまとめたものだとして理解しておりますけ
れども、それが最終的にこの1枚の追加資料に集約されていくのかと考えております。

また、この追加資料ではなくて、最終的に基本構想は文章で書くことになりますので、
これまでいろいろいただいたご意見、先ほど小野田先生おっしゃいましたけれども、こ
ういうコード化をしていかないと役所は動いていきませんので、資料2にあるような文
章にしたときにどう変わっていくのかということをご議論していただく際の、あくまで
参考資料という位置づけでございます。最終的には、文章があって、それを図式化する
という作業はまた別途行う必要はあろうかと思っておりますけれども。

小野田泰明委員

そのとおりだと思うけれど、やっぱり文章というのはリニアなもの、ピュアなものだ
から。でも、行政体というのは、プロジェクトでもそうですけれども、同時進行して、
お互いにネットワークしているではないですか。そうすると、やっぱりリニアなもの
と実際に起こっているのは同時進行してネットワークするもの、それを補完する意味で、

挿絵が入ったりしますよね。それはいろいろなところでやられることだけど、これくらい細かいとちょっと何とも言えないけど、これは情宣用のツールだと理解していますけど、この4つの図のようなものは報告書や答申の中に、もうちょっと簡単にしなければいけないけど入れたって構わないわけですよね。そういうものの複合体として最終的なアウトプットができ上がるわけですよね。全部憲法みたいに文章にしなければいけないということはないわけですよね。

折田総合計画課長

文章化したもののみが対象になりますので、基本的に絵というものは基本構想の…

小野田泰明委員

条例と同じなんですね。

折田総合計画課長

そうです。だから、そこはある程度コード化しなければいけないというところをご理解いただければ。

小野田泰明委員

なるほど。法律みたいに、どこへ飛びますというような、文章でありながらそういう構造を持ったものに書き下さなければいけない。だから、法律はああいうふうに難しいのですよね。

話がずれましたけど、そうやって文章のみが意味があって、図には余り意味がないと言われると。

折田総合計画課長

そういうわけではないです。

小野田泰明委員

それはしないような気もするけど、僕が思ったのは西大立目さんと似た意見なのです。これは何をするのかというのは、これに書きにくいというか、一緒の紙面に書くとごちゃごちゃになってしまうわけです。具体的なイメージはこうですという断片があって、それを実現するためのドライブの仕組みはこうですと、2枚あるのかと思っていたのですが、そうではないのですか。

折田総合計画課長

資料1でございませけれども、資料1の裏面を見ていただきまして、一番上でございますが、別添図3というのは、先生がお示しいただいた図でございませますが、こうした仕組みをどうやって動的な要素として書き込んでいくのかということは、これを見ながら文章化していきましようという方針で我々は考えていますので、要はこれをどういう形

で、実はこの図自体は、前回小野田先生から出していただいた図を我々のほうで、多分誤解もあると思うんですが、少しでもわかりやすくしようと思ひまして、単に電子化したものなんですけれども、こういったスタティックな図であるという前回のご指摘もございまして、その動的な要素をどうやって入れていくのかといったときに、この別添図3をベースにして議論を深めていって、それを最終的にどういう形で文章化していくかというゴールを見据えながらだと思ひますけれども、そういうイメージを我々は持っておりますので、それについてはこの場でご議論いただきたいと思いますところがございます。しかし、今日の議論のターゲットとして、その具体的なところまで、どこまで何を書いていくのかは、対象範囲をある程度限定しないと、今日全部つくるわけではないので、そこは今後こういうところを議論すべきだというようなご指摘をいただければ、これから議論していきたいと思ひておりますけれども。

大滝精一委員長

今、お話があったような、例えばこちらの仙台の都市イメージという、具体というか、全体の基本構想なりの見取図を入り口として見てもらって、それから実際に、ではだれが何をどんな形で動いたらいいかということをもう少しわかりやすく示すような別な図が2枚目に出てくるとかという、そういう構成には必ずしもなっているわけではないですね、今の時点では。だから、そういう方向で行くかどうかはちょっと別問題として、そういう考えもあるし、ご意見もいただきましたので、今後、そのところの取組は幾らでもまだできると思ひますので考えてみたいと思ひています。

今日の時点でこれを全部一気にそれをするというわけにはなかなか難しいというので、一つの考え方として理解できますので、少し検討してみたらいいかと思ひます。

小野田泰明委員

窓口だとして、西大立目さんがおっしゃったような、何をやればいいのかわからないという、命が込められていないということは置いておいて、これを見て何か言えるかということについて、少しシティープライドというか、具体的に仙台市が持っている歴史とか文化とか自然とか、そういったものについての若干のコメントは、僕はあったほうがいいと思ひます。シティープライド、仙台のイメージとここに書いてあるけど、これは仙台でなくてもどこでもいいわけです。だけど、そういう細かいことは書けないということかもしれませんけど、やっぱりシティープライドをやっぱり市民が感じられるようなまちをきちんとつくりますというのが非常に大事なことはないかと思ひますので、それをどこに書けばいいのか。何かこの余白のところでもいいですから、何でもいいのか何かあったほうがよくないでしょうか。

西大立目祥子委員

これは、図だけのことではないんですけれども、何か憲法でいうところの前文というか、条例の前文ってありますよね。ああいうものが少し市民に、ひとつの市としてのメッセージというか、目指すべきものを具体的にわかりやすい文で伝えられるといいかと

思うんです。

例えば広瀬側の清流を守る条例だと、私はあれはすごく好きなんですけれども、仙台の母なる川広瀬川と言っただけで、何か市民と共有できるものがあると思うんです。そういう言葉を探して、きちんとした前文でメッセージを伝えられたらいいかと思います。先ほどのターニングポイントが来ていることも含め、小野田先生がおっしゃった仙台の誇りもそこにうたい込んでいけるといいと思います。だから、もしかしたらそれに関する部分がこういう絵の中にも入ってくるのかもしれないと思うんですけど。

大滝精一委員長

そうですね、それはすごく大事だと思うのですが、恐らくそのこと自体が本当はこの新基本構想の中に、どこかに入っているべきなのですよ、本来は。その部分をどこに入れたらいいかという、ちょっとこれは大きな問題です。

すみません、では、ご意見の趣旨は了解しましたので、ただ、それをどういう形でこの中に入れ込んだらいいかというのは、ちょっとなかなか、今、すぐ出てこないで、本来はそのこと自体がこの基本構想の中に何かうたわれているということがあるべきだと思うんですけど。そこと、今、西大立目さんが言ったことがうまく符合するかどうかは、本来は策定の趣旨あたりのところでそういうのがあるほうがいいのか。ちょっとそのご意見は、こちらのほうでもう少し考えさせてください。

それで、今日、あと 20 分ぐらい時間があるんですけども、資料 1 そのものについては先ほど幾つか修正をして、それから皆さんにもう一回見ていただくということで、もう一回ご意見をいただきたいと思っているのですが、もう一つ、資料 2、都市像のたたき台というのがあります。これについても先ほどちょっとお話は出ていたのですが、この新基本構想の都市像たたき台という資料 2 についても、次の審議会で、起草委員会として大体こんなことを考えていますという形で少し出したいと思っていますので、こちらについても改めてご意見いただきたいと思います。

オーバーラップしている子供とか若年層についての話は、これは先ほど出ていましたので、そこについては少し検討を加えたいと思います。それ以外のところで、この都市像のたたき台について、修正をする部分があるとすればどんなところが必要かということについて、残りの時間で少しご意見いただきたいと思うんですけど、いかがでしょうか。

間庭洋委員

言葉なのですが、政府も成長戦略とかと言っていますけれども、新しいこの計画を策定するときに、比較表にもありましたけれども、成熟という概念を大分言われていたね。そういう中で、アジアの成長ということは事実そのとおりだと思いますが、その後、東北や仙台の成長についての概念が成熟化とどういうニュアンスの違い、経済的なことだけで言っているのか、その辺がちょっとわかりにくいところがあるかという気がいたしております。

大滝精一委員長

これは裏面の のところですね。

間庭洋委員

はい。言葉の使い方ですね。

私個人としては、東北のよさをもっともっと成熟させていくという方向がよくて、もちろんそれを支えるためには雇用とか暮らし、働くことも含む暮らしというものがしっかり基盤がなければいけないということで、成長的要素を全く否定するわけではないのですが、ただ成長ということが言葉としてぽんと来ると、何を目指す意味での成長なのか、ちょっとわかりにくくなる可能性もあるかと。ポテンシャルという意味での伸びしろの成長という意味だったらわかるのですけれども、全体の成長となると。10 か年計画ですから、もっともっとゆっくりとした歩みのイメージがあるのではないかと、私個人としては思うものですから。

大滝精一委員長

この点、いかがですか。もし、ほかの皆さんからのご意見いただければ。今の間庭委員のご提案は、だから、東北全体の成長につなげていくという言い方は、文章としては素直に読めるのですが、そういう言い方よりはもう少し東北の魅力とかよさを成熟させていくというような、あるいは東北の持っている特徴とか強みをより成熟させていくという表現のほうがいいのではないかというご提案だったと思うのですけど。

柳井雅也委員

恐らく、間庭さんが言われたような議論をしていく場合、例えば具体的な政策でどういったことを打ち込んでいくと成熟度を高めていけるのかというところを、少し我々はイメージとしてつかんでおかないと。そのあたりの補足とかありますでしょうか。

大滝精一委員長

間庭委員の言っていることも、わかることはわかるのです。つまり、幾らアジアのパワーを取り込むといっても、アジアのパワーを取り込んで、アジアと同じような意味で、同じような速度で成長していくと言っても、それはナンセンスな話だろうと思うのです。

小松洋吉委員

成熟という概念はとても難しいと思うのですよね。ロストの成熟社会もあるし、いろいろな成熟社会。だったら、そこはグロースではなくてデベロップメント、発展にしたらどうですか。全体の成長ではなく発展に。気になるのであれば。言葉の問題ですけど。

間庭洋委員

表題は発展になっていますね。

小松洋吉委員

まあ、成熟も含んでいるような感じがしますけどね、成長でも。

大滝精一委員長

少なくとも、どこの方角を目指していくのかということについての具体的なイメージを与えるという意味では、大事な議論ではあると思うのです。

柳井雅也委員

恐らく、成熟を仙台で代位していくとするならば、そういう発表の場とかそういった活躍の場を仙台として、舞台空間仙台という形で入れてもらって提供していくとか、そういった情報と情報を結びつけて、いわゆるマッチングをきちっとしてあげる作業とか、あと、場合によってそれを新しく進化させていく手法を仙台市自身が持ち合わせているという、それはもうお互いにとってのウィン・ウィンの関係になっていくような、そういうイメージでしょうか。ちょっと抽象的ですけどね。

小松洋吉委員

成熟がですか。

柳井雅也委員

ええ。そうすると、お互いに光を放ち出すということになってくると思うのですね。例えば、仙台駅の観光案内所の問い合わせの3割ぐらいが平泉だという話があったので、こういうものもこの成熟の問題とつなげていくと、東北の観光の成熟度とか熟度という点でいくと、やっぱり仙台もそういったところにきちんと備えを持っているといいという話になっていくのしょうけれども。

大村虔一会長

20 世紀をもう一回振り返って、先ほどの話の延長ですけど、日本国で考えてきたやり方でいうと、とにかくみんなの未来があって、そのみんなの未来のために経済を成長させると言って、どんどんどんどん走ってきたわけです。相当走ってきて、よくなったはずの頃に豊かさを実感できるというキャッチフレーズに変えるわけです。ということは、随分数字で見ると豊かになっているはずなのだけれど、どうも余り実感できないという言葉があって、実感できるという話になるのだけれど、その話を 10 年ぐらいやっている間に今みたいになってしまったのですよね。

やっぱり、そここのところの問題をどうとるかだと思うのですけれども、我々は何を目指すのか。豊かさだとかあるいは自分の自己実現とか、いろんなテーマが出てくると思いますが、それをどうやって、どういうキャッチフレーズのものに具体化していくかというテーマですかね。

結局、掲げたやつは何段階があるんだけど、それぞれの段階で余りうまくいかないままに次の段階に行こう、突っ走らざるを得なくなって、今の場合は、やっぱり貧富の差

みたいなものが極端に出てしまったのをどうするかという話に追われているわけです。

柳井雅也委員

例えば、まちは限定しての話になるかもしれないですけど、経営学とか経済学で言うところの残存者利益という考え方がありますよね、一番残ったものが最大の利益を得るという。恐らく、その都市の個性とか魅力というのは、そういった残存者利益をめぐる戦いだったと思うのです。例えば、角館がなぜすばらしい武家屋敷を持っているのかとかという議論は、やっぱりそういったところはたくさんあったんだけど、角館自身が選ばれてきたというところがあったと思うのです。そういったところを、例えば仙台と結びつけることによって、向こうの価値がもっとアップしていくとか、あるいは経済的にそういった観光客が仙台を基点にしながらルートとして結ばれていくとか、またそういったほうに、例えば我々、市民力でもってそういったものをサポートしていける体制をつくっていくとか、そういったときに、更に高いホスピタリティーとかが磨かれていくわけですから、そういったつながり方というのは一つあるのかという感じはします。観光というか、まちづくりという視点の切り口なのですけどね。残された個性をちゃんと仙台が代位してあげるということだと思うのですけど。

大滝精一委員長

ここはちょっと間庭さんの提案というかご意見はよくわかるのだけど、なかなかすぐにどうやって書きかえたらいいかという名案が浮かんでこない。どこに向かっていくのかということについては。

間庭洋委員

最近、創造都市論とか、創造、クリエイティブ、それイコール成長では必ずしもないのですよね。東北はそういう方向なのではないかとイメージしているものですから、成長という言葉は、どこにも東北を、サポートしていくことを概念的に考えるのかというのを、ちょっと違和感を感じたものですから、さっきのような投げかけになってしまっ

大滝精一委員長

これは公共投資だけでなく、やっぱりリノベートしていくとか、今ある価値を上手に、換骨奪胎して新しいものをつくりだしていくとかという、そういう意味での成長イメージ、新しい成長のイメージですよね。何かそういうものがもうちょっと。

間庭洋委員

あと、東北の場合は、中には失われたものを回復するというのもありますね、テーマとして。リノベーションに近いですけども。

大滝精一委員長

だから、この図の中に盛んに出てくるのだけど、眠っている資源を再発見して組み合わせていくとかという、こういう議論の中と新しい意味での成長のイメージみたいなものがうまく結びつくと思うのです。それをうまくどうやってこの文章の中に取り込んでいったらいいかというのはちょっと工夫しないといけない。どこに仙台のまちをとるか、あるいは仙台の都市イメージを持っていったらいいかという、議論としては非常に大事だと思うのですけど。それは潜在的にいろいろな議論が行われたし、図の中にも書かれている話なのだけだ。

江成敬次郎委員

少なくとも、タイトルの言葉と一致させたほうがいいという感じはしますね。ですから、東北全体の発展を応援しというのであれば、やっぱり東北全体の発展につなげる役割という、そのほうが多分理解はしやすいだろうと思う。

それともう一つ、実は3番目、の3番目のポツが、何かタイトルの内容とちょっとそぐわない感じがするのですけれども。3番目のポツはこれは仙台の中の話ですよ。

のタイトルは、東北とか世界とつながるという、そういうキーワード、タイトルになっているのに、3番目は地下鉄東西線とか南北線の話で、これは仙台市内の話。だとすると、むしろの中身に近いのではないかという、そんな印象を持ったのですが。ただ、

のタイトルともちょっと必ずしも一致しないかという感じはするのですが、でも、内容としてはやっぱりの中に含まれる内容ではないかという、そんな気がしたのですけれども、どうですか。

大滝精一委員長

これは地下鉄を基軸にという書き方をされていて、この中ではだから、仙台市内の交通体系としてこういうものを考えていくというだけではなくて、もうちょっと地下鉄を中心として新しい投資が行われていて、そこで仙台全体の都市インフラをつくっていくということで、市民が利便性とか交通の便利さを享受するとかというだけの話でないようなものをこの中に表現しようという。そういう非常に大きな、恐らく2,700億円という投資が行われて、10年くらいの近未来で考えてみても最大級の投資が行われるということイメージして、それは仙台の中だけの都市の問題というよりも、もう少し東北全体にとっても意味のあるような非常に重要なインフラを形成して、そのインフラをどうやって生かしていったらいいかという、多分そんな問題意識でこのの中に入れてあるという感じではあるのですけどね。こういう表現の仕方だけでうまくそれが表現できているかどうかというと微妙だと思いますけれど、書き方としてはそういう表現の仕方になっていると思うんです。

間庭洋委員

私も、こういう基軸による都市機能が非常に高度になっていくことや、それから例えばエンターテインメントだとかビジネスだとか行政機能、そういったものが非常にモビリティが高まるだとか、いろいろな意味でそれ全体が、東北に対するいろいろな、仙

台に来る方あるいはこちらからも働きかけを含めて、大きな都市機能の全体が一つの東北に対する役割のアップにつながるというイメージは持っているのですけれどね。例えば、東西線でいけば、動物園のほうから観光地域や広瀬川や都心商業地域、業務地域を通って東部、それから卸町だとか、そういった産業軸につながることで、東北からは非常にアクセスだとか、あるいは仙台に来たときの行動が非常にしやすくなるとか、そういった意味での連関性はあると思います。足元の問題でありながら。

柳井雅也委員

一番重要になってくるのは東西線かと思うのですが、これは全部にかかわっているのです。CO₂の削減から健康、あとモビリティの問題から。ただ、ここの柱というのは、国際交流から産業振興、あと地域観光、都市構造も一切合財ここに入っているわけで、それで結局ここにおさまっていったというのが正直なところで、おさまりがいいかどうかはわからないですけれども、ここに入っていくということなのでしょうね、結局。

大滝精一委員長

審議会には一応ここに入れて提案するということにしましょう。いろいろ議論があったということについては、もしご質問があればしたいと思いますけれども。

ほかにいかがでしょうか。

さっきの上から3行目のところは、東北全体の成長という言葉を発展という言葉に書きかえたいと思いますけど、そのニュアンスは少し、間庭委員からの問題提起についてもうちょっと踏まえたほうが良いと思いますし、全体のさっきの図の話とかも含めて、成長とか目指すべき方向のイメージみたいなものをもうちょっと明確に書いたほうが良いというのは、確かに当たっているかという感じは私も持っているのです。東北、上手にアジアのパワーを取り込むけど、でもアジアのパワーを取り込んで急成長するんだみたいな話ではちょっと違うんじゃないのという、そういうことがもうちょっとわかりやすいような表現に変えたほうが良いという感じはしますね。

ほかにいかがでしょうか。

間庭洋委員

資料1でかなり重要なキーワードになっております「行動する市民力」が、資料2では最初の上のマルポツ2つ目のところに記載されているんですが、それ以外のところは比較的、関係する表現はあるのですが、急に何か見えなくなっているような感じが、文章の中に沈んできているような感じがしていますので、何か資料1の勢いが資料2にもつながるように、見えるように。ないわけではないのですけれども、文章として表現されているので、キーワードとしては1か所しかないように思うので何か工夫が必要かという感じを、資料1との対比で印象として思いました。

小松洋吉委員

1 か所だから強調できるのでは。私は全体的にとても何というか、いい表現をされていると思うのですけど。市民にもわかりやすいし。全体としてはとてもよく的確にわかる、短くしているというところは非常にわかりやすいと思います。

大滝精一委員長

資料1の上から 2 で都市像というのが出てきますよね。この中には相当「行動する市民力」についてのいろんな記述が出てくるということで、ここと資料2の新基本構想の都市像のたたき台というところの関係みたいなものというのは、どんなふうを考えていったらいいのですかね。同じことを書いてもしようがないという気も一方ではするのですけど。他方で、しかし、この資料1の 2 の都市像のところでは、相当「行動する市民力」という話がいっぱい出てきていて、むしろ、どちらかという、資料1の 2 の都市像の最初のパラグラフのところをもうちょっと敷衍して書いているのが資料2という、読んでみると、そういう感じに近いという書きぶりになっていますよね。

間庭洋委員

文章としてはちゃんと入っています。今後、これがキーワードとしていろいろなものに使われるとすれば、ちょっと文章の中に沈んでいる印象があったものですから述べただけではありますが、それは間違いとかそういう意味ではないです。

あと、もし違うことが一つあれば、事務局のほうにお尋ねしたいのですが、資料2の裏面の一番下に、いわゆるひとつの大きなミュージアム、これは施政方針演説にもありました、施政方針演説を読んでちょっとおやっと思ったのは、ここに書いてある印象が何かいっぱいあるミュージアムをつなげていってみたい印象、表現だった感じがしているのですけど、違いますよね。まち全体がミュージアムというイメージですね。

折田総合計画課長

はい。

大滝精一委員長

そうだと思います。私もこれは推測なのではっきり言えないんですけど、市長さんのイメージとしては、今でもミュージアムのネットワークというか、それをやっていくということは実際にもう動いていて、そういう動き自体も取り込んだ上で、最終的に、今、間庭さんがおっしゃったような形の方に、ミュージアム都市として持っていきたい。だから最初の段階というか、今既にやっていることも含めてという形なのではないかと思うのですね。そういう推測をここで言ってもしょうがないことだけど、多分そういうことだと思います。

間庭洋委員

目指すのはこっちだと。はい、わかりました。

西大立目祥子委員

ちょっと、ただ1つの大きなミュージアムという言い方が、どのくらい伝わるかという点が心配で、地域資源の活用みたいなことを図の中でたくさん言っているのであれば、地域資源を活用してそれを編集し直す、磨いていくことによってミュージアムをつくるというニュアンスが、ちょっとどこかに加わったほうがいいように思います。

大滝精一委員長

では、付け加えましょう。少なくとも、仙台が持つ魅力的な資源とか、あるいは資源の発見を通してとかという、そんな文章を少しこの中に入れるというか。それは特に問題ないと思います。今まで議論してきたこと、あるいは市長さんがおっしゃったことと全然矛盾しないと思います。

では、すみません、もうお約束の時間を過ぎてしまっているので、一応、新基本構想の都市像たたき台については、今までいただいたご意見を踏まえて少し中に手を加えることにして、今度の25日の審議会でもた議論いただくということにしたいと思います。

念のため、この資料2も、手を加えた部分についてはどこをどういうふうな形で手を加えたのかということについて、もう一回皆さん方にも見ていただくということと一緒にしたいと思いますので、この資料1と資料2についてはそういう形で進めていきたいと思いますが、それでよろしいですか。

(はいの声あり)

大滝精一委員長

ありがとうございました。

なかなか大変な議論で、何とかここまで来ましたが、この後また3月25日の審議会ではいろんなご意見をいただくと思いますので、先ほどちょっと申し上げたように、それもまた更に踏まえて、これから基本構想の中間案をまとめていくということになると思いますので、今日いただいたご意見の中でも、すぐにこの文書の中に入れるということができないのですけれども、具体的にこの中間案を書いていく段階の中で反映できるようなものについては、できるだけそういうものを書いていく段階の中に埋め込みたいと思っています。

今日は大体そんなところでよろしいでしょうか。特に皆さんのほうから何かご意見がなければ、今日はこれで終了ということにしたいと思いますが、よろしいですか。

(はいの声あり)

3 閉会

それでは、どうもありがとうございました。これで終了したいと思います。